

357-139



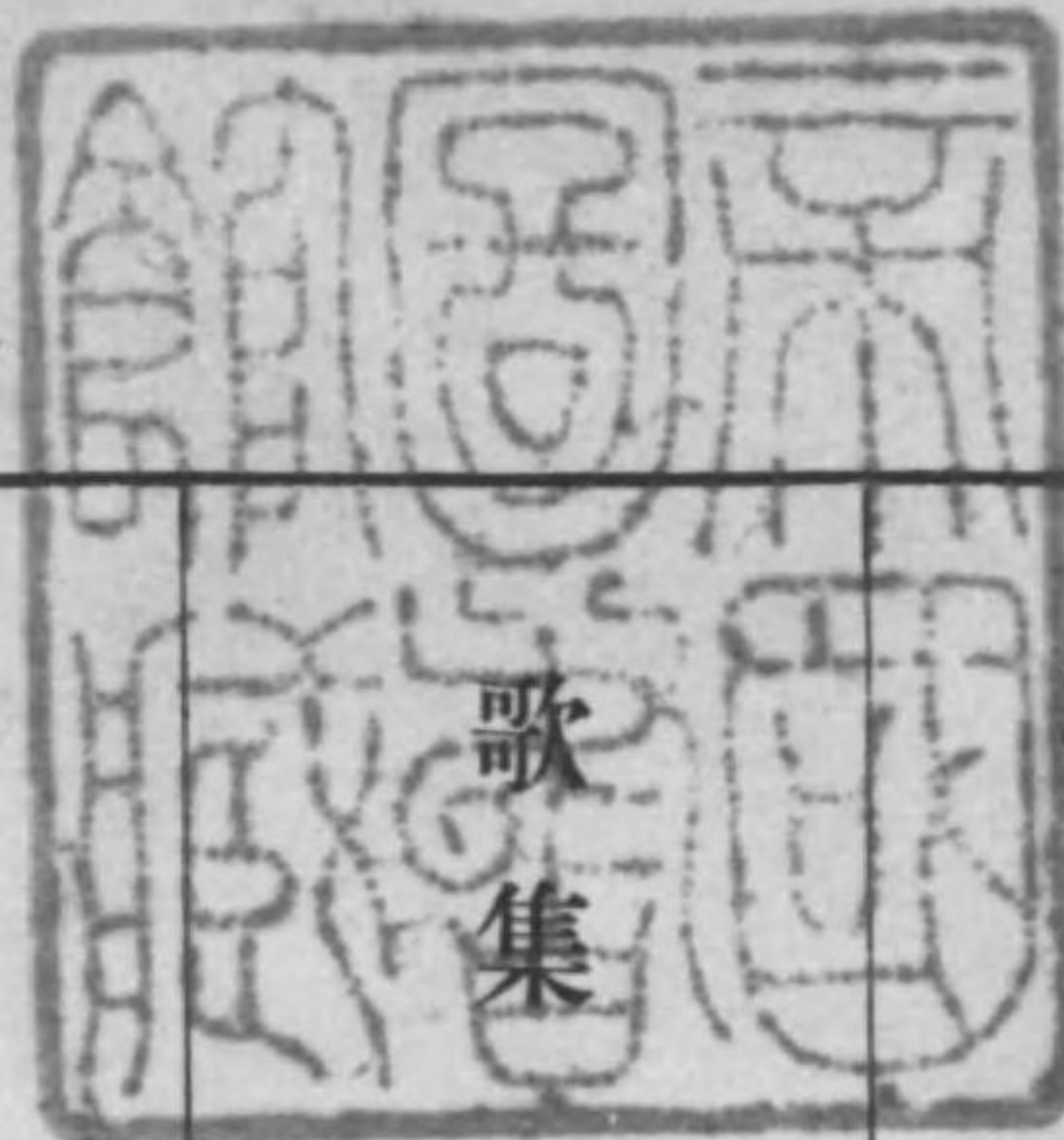
1200501410759

357  
139



始





齋藤茂吉著

〔アララギ叢書第百廿三篇〕

歌集  
遠遊

岩波書店刊行





オウベルシュタイネル先生



目次

維也納歌稿 其一 (百二十一首) .....	一
ドウナウ下航 (十九首) .....	六〇
ブダペスト (十一首) .....	六七
獨逸旅行 (百二首) .....	七二
維也納歌稿 其二 (九十九首) .....	一一一
維也納歌稿 其三 (百五十首) .....	一五五
伊太利亞の旅 (百八首) .....	二二九
維也納歌稿 共四 (十三首) .....	二五九

わが心やうやく和み雪つもる獨逸のくにを南みなみへくだる

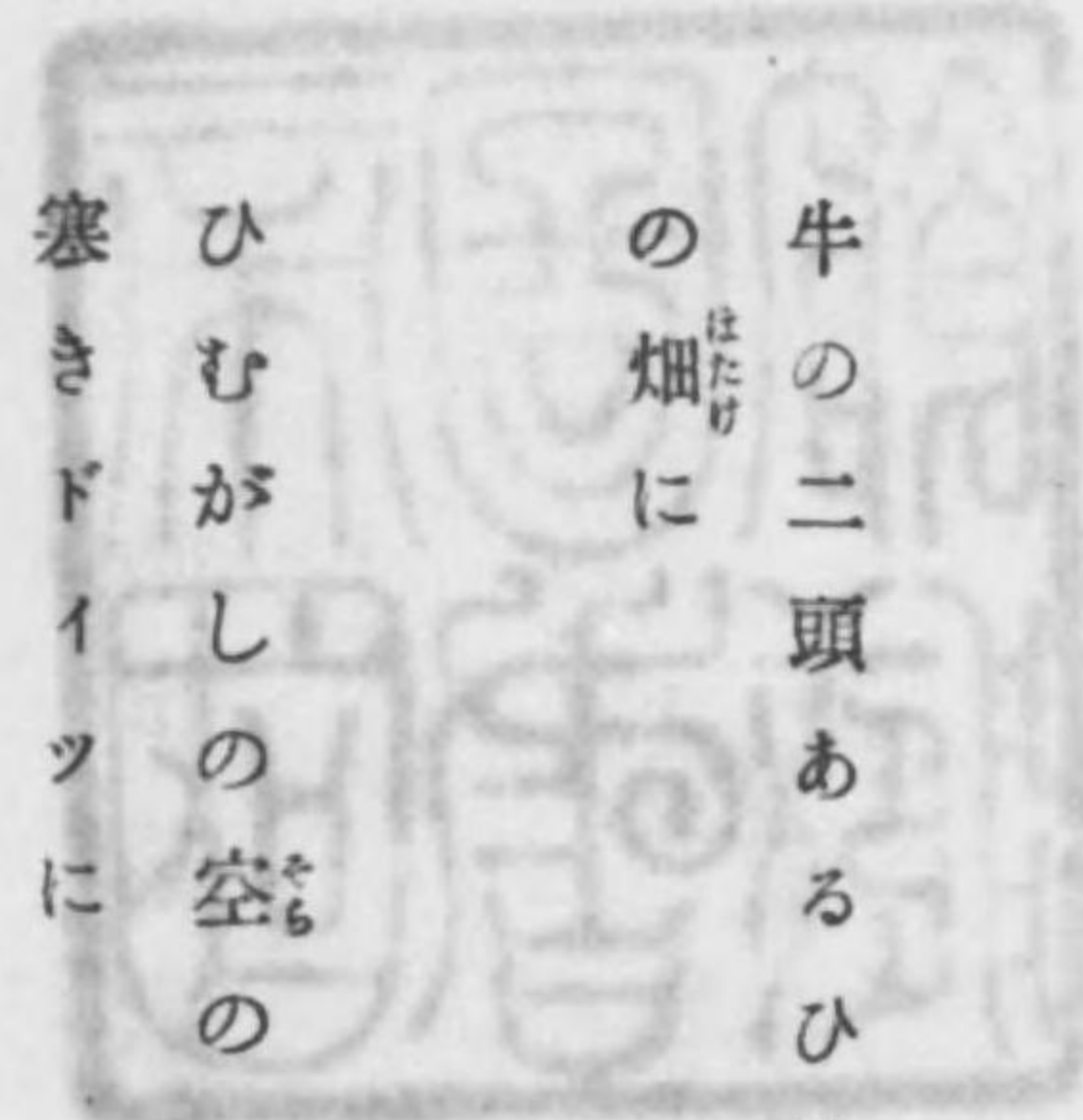


維也納歌稿 其一

大正十一年一月十三日午前八時伯林 Anhalterbahnhof を出發して維也納に向ふ。前田茂三郎君見おくる

見わたしの畑に雪降りかざりには黒くつづけ  
 る常緑樹の森

牛の二頭あるひは馬の二頭にて耕せる見ゆ冬  
 の畑に



ひむがしの空の  
 一ところ紅の  
 にじみたる見ゆ  
 寒きドイツに

カバン負ひて小學兒童行く見ればいづこの國  
 も穉はかなし

かくのごと朝早くより働ける獨逸農夫を見す  
 ぐし兼ねき

落葉樹の木立のなかに水たまりあり折々反射  
 の光をはなつ

丘陵<sup>きやうりやう</sup>がゆるくつづきてその上に林あり墓地<sup>ぼち</sup>あるを吾が見つつ居る

童子等の櫓<sup>こり</sup>の遊びの目に入りし小さき家の一廊も見ゆ

寺の尖塔<sup>せんた</sup>が見えしとおもふに大きな停車場にとまるドレスデンなり

水量<sup>みづかき</sup>ましひたにごりたる Elbe<sup>エルベ</sup>の河を満<sup>み</sup>たして雪はながるる

ドレスデンをいでて間もなきにこの河の對岸<sup>たいがん</sup>の山に雪降りにけり

シャンドウを過ぎてあらはれし谿谷<sup>けいこく</sup>を目守<sup>まもり</sup>りてゐたり遠<sup>とほ</sup>き旅人<sup>たびびと</sup>

蒼き空はつかに見ゆるところあり山にかかり  
て雪ふりながら

雪ふかき國境こくまがらに来て吏りのまへに整理せいりとどかさ  
りしトランク開ひらく Tetschen (Dekin)

午後六時半ごろ空そらにかすかなる月あることを  
氣づきつつ居り

二ふたたびの國境こくまがらに来て無造作にわがトランクに  
許可きょかの印しるしうつ Grund (Gmunt)

月かげの雪てらす國正目こくまきめにし埃オウストリア太利リアにわれ入  
りにけり

やうやくに月ひくきころおもほえず見えわた  
りけれ Donauドナウの河は



Droschkeといへるに乗りてわれ行けり石疊いしだたみなる  
 冬の夜のおと Hôtel de France 投宿

公使館たづね來れば手續てつぎをすまし居りつつ同  
 胞ばうにあふ 一月十五日

銀行より吾は歸りてこの國の紙幣いろいろ並  
 べ見つつゐる 一月十六日

ドウナウの流れの寒さ一めんいめんに雪を浮べて流  
 るるそのおと 一月十八日訪笹川正男君

一月二十日神經學研究所にマールブルク先生 (Prof. Dr. O.  
 Marburg) にまみゆ

大きな御手無造作にわがまへにさし出され  
 けりこの碩學せきがくは

けふよりは吾を導きたまはむとする碩學の聳  
見つつ居り

おぼつかなき塊太利語をわが言ひて教授のそ  
ばに十分間ばかり居る

はるばると来て教室の門に入る我の心はへり  
くだるなり

一月二十二日(日曜)一人外出、笹川君と夕食を共にす

雪ふれるうへに日の光さすさまを小公園にひ  
とり見てゐる

一月二十三日(月曜)教授材料を指導す。この日オウベルシュタ  
イネル先生(Hofrat. Prof. Dr. H. Obersteiner)にまみゆ

はるばると憧憬あぐがれたりし學がくの聖ひじりまのあたり見  
てわれは動悸どうきす

門弟もんていのマーブルクをかへりみて諧謔かいぎやくひとつ  
言ひたまひたり

一月二十九日(日曜)笹川君とドウナウ河を見、午餐を共にす

こほりつつ流るるにかあらし豊ゆたかなるドウナ  
ウのみづの音のさびしさ

暖ぬくかき君の部屋にて時うつり食しょくにハンガリイ  
の Paprika を愛あいづ

一月三十日、雪大に降る。終日教室にて勉強し、夜笹川君に會ふ

業房げぼうに一日ひとひこもりて天霧あまぎりし降りくる雪ゆきををり  
をり覗のぞく

二月一日、ホテルより移居す(D/Fr. Halphen. Nussdorfstr. 77.)

やうやくに部屋片づけて故郷こきやうより持てこした  
ぶさぎを一纏ひとまとめにす

朱硯しゆいんの小さきを荷より取りいだし机かたの片隅すみに  
置きて見て居り

二月十日、同胞と共にオペラ座にてアイダを観る

巴里パリにて一たび聽けるこの歌劇かげきけふのゆふべ  
に二たび飽かず

二月十一日、日本紀元節

朝はやく日本公使館に祝言をまうしそれより  
自らの部屋をさがす

二月十四日、業房勤勉、夕べ部屋をさがす

太陽の紅くしづむを第九區の石階のうへにし  
ばらく見たり

三月十九日、マールブルク先生に案内せられて、Schwarzberger  
Parkに遠足し、畫家 Keimec を訪ふ

雪ふかく積める山べの日のひかり新しきドイ  
ツ語を幾つか憶ゆ

二月二十日、伯林なるロスト夫人・前田茂三郎氏伊太利の旅を了  
へて立寄り、伯林に立つ

業房に業いそしめばこの都市に君と遊ばむ時  
を無くせり

三月三日、ゆふへ Hotel Sach にて日本人會を開く

ひむがしの國のはらからあつまりて本つわが  
國祝ぎあひにけり

三月七日、Wagner 教室の大講堂にて神經學會あり

學者らをまのあたり見て業績のつながるさき  
をたぐるがごとし

三月十日、笹川君の歸國を、岩淵、佐藤、三木、井手の諸君とともに、西停車場におくる

ウインの第一歩より君のみなさけをわれ蒙りぬ忘るとおもふな

三月十一日(土曜)、オウマルシユタイネル先生子の業房を訪はる

おもひまうけず老先生そばに立ち簡潔にわれを勵ましたまふ

三月十三日(月曜)、マールブルク先生はじめて子の標本を見る

わが作りし脳標本をいろいろ見たまひて曰く  
 „Resultat. positiv!“

四月五日(水曜)、四月一日駿帝カール、マデエラ島にて流行性感  
冒のために薨去せらる。伯林のクレムペレル教授、露都にてレ  
ニンを診察す。そして、器質性疾患にあらずして、過勞症狀なる  
ことを報ぜり。(Keinerlei organische Krankheit hat. Er ist  
jedoch überarbeitet und übermüdet, usw.)夜、カフェに入  
りて心をしづむ

きのふ大學の講堂にて聽きし學者等の報告を  
二三行づつ書留む

四月九日(日曜)、維也納の童子等と、ライムンド劇場(Raimund-  
theater)にシュニッツレルの「遺言」等を観る

童子らをつれて遊べば東京にのこし來りし茂  
太おもほゆ

四月十六日(日曜)、Ostersonntag.  
四月十七日(月曜)、Ostermontag.



マウニル  
Mauerの青山に一日遊びたる耶蘇復活の日曜の  
よる

業房は今日も閉ぢたれば寺々の樂を聴きつつ  
市内を出でず

四月二十日(木曜)、オウベルシュタイネル先生をクロッテンバッ  
ハ街三番地の邸に訪ふ

年ひさに戀ひて慕へる大人の御手をにぎり  
てよろこびやまぬ

わが業を勵ましたまひ勘忍の日々を積みとふ  
言のたふとさ

「四週間業績を羨むことなかれ」かくのごとくも  
諭したまへる

小間使の愛しき面よウインに来てはじめて見  
たりかかる少女を

古りし代の希臘哲人の胸像がこの庭に一並び  
に並びてぞ立つ

黒き鳥木立の間を縫ひ飛ぶ見ればこの大きな  
の起臥おもほゆ

コペンツルの丘陵青く起きふすと此處よりふ  
りさけて暫し和ざゐる

東海の國よりとほく來りたる學徒の吾よ今日  
をな忘れそ

四月二十日、労働者デモンストラチオン

十二萬と注せられたる勞働者の示威行進にも  
目を瞠りゐる

つらなめて歌うたひ來る一群にわが知れる車  
掌處女も居るはや

行列の右にも左にもくばり來る「赤き旗」といふ  
新聞求め持ちかへる

四月二十二日、移居（ハルフェン方よりキイン方に）

寢に歸るのみとおもへどこの部屋を祝福し暫  
くして二重の窓を閉づ

四月二十四日、夜カフェにて時を通しぬ

日本の鯉のぼりのこと言ひし通信に「勇猛の象徴」といふ語を用ゐあり

四月二十六日、Hotel Imperial に川上公使夫妻に會ふ。本田公使夫妻同席なり

川上公使夫人と同船にてわれ來しゆるにけふ  
甘納豆あまなち豆をもらふ

四月三十日、ひとり Prater 公園にあそぶ。夜、友をフランツヨゼフ停車場にむかふ

Prater にひとり來りて奇術師と蚤戦争と泣く小劇と

伯林より來れる友は長崎の同僚にしていつのまにか髭おとし居り

五月一日、Staatsfeiertag.

マイタック  
Maitagの示威行進は雨のため中止となりしか警  
官等歸り來る

五月七日(日曜)、Laxenburg 離宮行

デモンストラチオン今日に延びたれば一しき  
り労働者等の行進つづく

遠足を好める市民むらがりてこの停車場ていしやばに時  
を惜しめり

いつしかも青くなりたる丘こえて Steinhofシュタインホーフの狂  
院が見ゆ

カスタニエン  
Kastanien-Alice の色は匂ひだち背向の丘の青き起  
伏

この城に入りて聯想の糸ひけば封建の世も鬱々として

白鳥の浮きて遊べるきよき水城をめぐりて今も湛ふる

太陽の紅く落つるを見つつゐてドナウ流域のひろきをおもふ

五月十五日、アルツール・シュニッツレル六十歳誕辰

青年の作家とおもひゐたりしにはや大家となりて動搖もなし

五月十七日、教室にて

この野郎こ小生たま利きなことをいふとおもひたりし  
かば面罵めんばをしたり

五月二十一日、Hofbibliothek (Nationalbibliothek)

マリア・テレジアの御臥おんふし處どをもぞろぞろと見物けんぶつ  
人は見て過ぎむとす

戦勝の油繪壯麗に懸けあるも悲哀をさそふひ  
とつなるべし

五月二十一日、Schönbrunn を案内す

二人來し法醫學者を案内し「街の少女」のこと一切言はず

五月二十六日、藥房にて

午後になり間もなく雷の鳴りたるを吾の心は  
楽しむごとし

五月二十八日（日曜）、Mödling 行

見るかぎり青野ゆたかに起伏せば水の中にて  
ひきがへる鳴く

アムゼルが樫の木立に來りて啼く冬のあひだ  
は啼かぬこの鳥



青野には日の光にさやるものなきに蟋蟀ぞ鳴  
く晝のこほろぎ

酸模すかんぼの花のほほけしひと一群むらも異國ことくゆゑにあはれ  
とおもふ

松かせの聞こゆるときに心寂し遠くも來つる  
われの心の

六月四日、  
Voslau 行

アカシアの花白く散り櫻桃おうたうもきのこも店頭  
見えて春更く

砂しろき大きなる湯の池に入り日本にわたる  
ごとき一とき

この町に石垣あるを嬉しみてカスタニエンの  
樹のもと行くも

夏の野をながるる小川砂白くよく見れど魚の  
走ることなし

南方のVoslanの温泉にこころ和ぎ日は傾きぬ青  
野のはてに

レーニンの疾病を報せし記事のありGehirnschlag  
即ち卒中せしと

六月五日、Dr. Pollak より聘招を受く

今にても富み足らひたるところあり若葉のし  
たに蚊の飛ぶおとす

六月十一日(日曜) Lichtenstein Gemäldegalerie を訪ふ

半日を古代美術にこだはりて午後黒人の踊に  
放心したり

六月十四日、シエンブルン動物園に立寄りて去る

白き鸚鵡園丁の手にのり居りて離れがたきを  
吾見つるかな

六月十八日、童子二人を連れ Servitenkirche の Prozession を  
見たり

ふるさとの茂太のことをおもひ出しこの童子  
等に菓子を與へし

六月二十三日、Reichert 顕微鏡工場を見る

顕微鏡の會社見學に來ておもふこの間にも餘  
裕のなきをおぼゆる

六月二十四日(土曜)、猶太殿堂に入る

東方の禱のゆるに支那びとのうたふに似たる  
悲しさありて

六月二十五日(日曜)、美術館、マウエル行

ペーテ  
Peter Brueghel の冬の村落圖その他を見て出で來  
たりけり

雷らいの雨あめ音ねたてて降りし野ののうへに二たび光ひかりさ  
すを見て居ゐつ

六月二十六日、友を訪ふ

電車罷業でんしゃはいごうけふもつづきて夕ゆふ闇くらの街まちいくまがり  
歩あきて歸かへる

六月二十九日、Este'sche Kunstsammlung 博物館

エジプトの狒ひ狒ひの石像いしざうを眼まなこにとめて心こころよろこ  
びながら出でて來こつ

七月二日（日曜）Purkersdorf 遠足

谷間<sup>たにま</sup>には Jägerbrünne といふ泉<sup>いづみ</sup>あり音して湧きぬ  
わがかがむとき

この村の修道僧院に一團の孤兒來りいのりの  
歌うたふこゑ

いちごの花一めんに咲くところよりまどかに  
青き山見えわたる

七月三日、四日、吹田、成瀬、小牧三教授と共に獨逸國民劇場に  
Moissi の演劇を見る

劇はててより観客群集の少女等が閑<sup>とまり</sup>をつくり  
て讚歎す噫

七月九日(日曜) Schwarzenberger, Zentralfriedhof.

カスタニエンの繁る木下に休らふを貴きもの  
のごとくにおもふ

張りつめて爲事する七日の一日だにかかる寂  
しさを愛しまざらめや

汗垂りて中央墓地に來りけり墓地の木下にし  
ばし眠らな

我が生るときに痛々しくあり經しが一人この  
墓地に來る寂かさ

七月十五日(土曜)、維也納水源見學す

洞窟の中にみなざる雪解水帝王もつねに召し  
たまひにき

アルペンの雪解の水のとどろきを「Keimfrei」と  
注解をせり

維也納市の水道源を約言すれば氷のみづと謂  
ふべからし

七月十六日、Semmering

白雲はこの大谿に動けどもその間にしてた  
なはる山

くろぐろと樅の木原のつづきたる山ふりさけ  
て曉に居り

山の氣ゆふべとなれば冷え來りアルペンの脈  
おもほゆるかも



この山に飛びかふ螢ほたるの幽かなる青きひかりを  
 何とか言はむ

暗やみの谿を越えたる向う空はのかにあかし  
 町の灯あかりか

赤き屋根この山原に點在し傍看せしむる時に  
 だに好し

シュネエスベルグ レユネエスベルグ は即ち雪山せつさんの意味にしてふかき谿谷けいこく  
 を幾つも持てる

七月二十日、齋藤秀雄君の寫眞帖に題す

おのづから君を慕したひし少女まよめ子のしづかなる眼  
 も寫しけるかな

七月二十二日、東京來信

出<sup>で</sup>羽<sup>は</sup>の海<sup>うみ</sup>の身まかりし知らせ受取りてよりあ  
やしき迄に東京おもほゆ

七月二十三日(日曜)、ひとり街上を行く

朝宵を青<sup>せい</sup>年<sup>ねん</sup>のごとく起<sup>おき</sup>臥<sup>ふ</sup>してひぐらし鳴かぬ  
夏ふけむとす

## ドウナウ下航

大正十一年七月二十七日、午前七時半、Donau-Brücke (Prater Reichsbrücke) の側より船に乗る。内藤、津田(終吉)、津田(博通)三氏同行す

空合そらあひにつづかむとするきはひにて「青きドナウ」  
は今日けふこそ濁れ

大きなる河としいへば親おやしかり白き水鳥みづとりひら  
めき飛びて

鴉かららは相むらがりて低く飛ぶ島の森に來れば  
入りゆくもあり

ゆたかなる河のうへより見て過ぎむ岸の青野あそ  
は牛群れにけり

すでにして過ぎ來し森のかすむまで吾等の船  
はかくも速しも

大き河國をくだれば暗緑の森のこごりし陸を  
こそ見め

緑なる平野より來てDonauに支流のあふは寂し  
かりけれ

平野には木立つづきて青けれど黄色に見ゆる  
處ありたり

ひむがしに向ひ流るるドウナウの河にせまれ  
る山も青しも

Thebenに著けば此處にも支流あり山の上なる  
城塞しろく

砂原すなはらの白く見えゐるところあり支流がここに  
合あひをあらしも Pressburg

元始的に見ゆることあり網たれてドウナウの  
鯉捕る人のあり

おほどかに流るる河の舟に添すふ水車しやがありて  
麥をひくらし

此處にまた支流がありて國原の森のあひだを  
浸まして來まる

岸ひくく白き鳥群れ丘陵の半腹に牛群れたる  
も見ゆ

ここにこにして支流 Waag の合ふところ水銀すいぎんのいろ  
に光ひかりを没ぼつす Komorn

ドウナウをかへり見すれば大きな河としな  
りて浪音なみのともせず

ひくき岸よりただに平野ひらにつづきたるウンガ  
ルン國くにわれも愛でつる

午後六時わが船つけば Basilikaバシリカの寺院のうへに  
入日いりひさしたり

ブダペスト

ドウナウにせまり來れる山見つつエレデンタ  
の唄聞けども飽かず

夜のドウナウ語りあひつつ朝はやく Ersebethid  
を渡る

城砦にもものぼり來りつ Joseph Peridy 大尉がドイ  
ツ語にて導く

名にたかき泥浴に來て見しかども時を惜し  
みて誰も浴せず

王宮をも吾等は觀たりエリザベト皇后の悲し  
き黒き御ころも

かくのごと小公園に芍薬も紫蘇石竹もにほひ  
てかなし

西瓜、瓜、桃、李、巴旦杏、青唐辛子をも店になら  
べつ

この町の Joseph Reitzer 君の日本語を十ばかり手  
帳に記したるのみ

唐黍たうきの赤毛あかのふさもなつかしと街が上じやうを來て足  
をとどむる

大學の助手がわが手を痛きほど握り、Rassen-Ver-  
wandt」と言ひたり

この都と市しも一たびボルシエヴィズムスに破れ  
たる過く去こ持つことを暫しおもへる

### 獨逸旅行

ミュンヘン。大正十一年八月四日、維也納を立ち、獨逸ミュンヘ  
ンに著く

ミュンヘンにはじめて來り旅びとの第一だいいち歩いっの  
ごとくに歩あく



諸教授を訪ひてころは和なぎゐたり Spielmeier,  
リューザン イツセルン  
 Rüdín, Isserlin.

パワリアの古ふるき都と市しとしおもへればなべての  
 物がこころに觸ふり來く

ブラッンス ホーフンロイ  
 Platzl, Hofbräu もひとり來てこの國くに人びとのなかに醉ま  
 ひけり

イザールの青あおきながれとひと歌うたふこの山やま川がはは  
 あはれとどろく

日ひさかりの汗あせは垂たりつつ フラウエンキルヘ  
Frauenkirche の塔たのうへ  
 の吾われはや

観みるべきはおほかた觀みたり豊ゆたかなるピナコテ  
 一ひとクもいそぎめぐれば

„An Ausländer wird keine Ware abgegeben“ この貼り紙に  
なまこを睨る

この町に六日をりつつ維也納より心落ちぬざ  
ることをおもはむ

戦にやぶれしあとの國を來てわれの心は驕り  
がたしも

オーベルアムメルガウ。八月八日、九日、Oberammergau に至  
り基督受難劇 (Passionsspiel) を観る

湖の濃き碧のいろ高山のはだら雪のいろこの  
國ゆけば

牛むるる牧のかたはらに面紅き雉子の降りる  
るは恐怖なけむか

Bradford Craginといふアメリカの青年と同じ家に  
寝たり

十年に一度のみなる受難劇ひとり旅路のわれ  
會ひにける

この村の小川の岸におりたちて藻のゆらぐさ  
ま心こほしむ

石竹と天竺牡丹と花あふひ日本の村を行くに  
し似たり

基督の一代の劇壯大に果てむとしつつ雷鳴り  
わたる

相こぞりこの村人の演ずるを神の默示と代々に  
継ぎ來し

青き野が峽のあひだにつづけるに牛の頸の鈴  
をりをり聞こゆ

きりぎりす夏野に鳴けり故郷の野べを思ひて  
眼つむりぬ

おごそかに既にせまれるアルペンの山脈にし  
も相對ひたる

山かひのさびしき村に立ちてゐる寺の尖塔は  
心をしづむ

ここを流るる Ammer 川はおのづから Ammer 湖  
まで北へ流るる

ニュルンベルク。八月十一日この都市を見る

あわただしくこの都市に来て古城をも Dürer の  
家をも見たり

古城にては「ひよつとこの面ひとつ見つか  
る時に渡来しつらむ

パツリア製鉛筆工場はこの都市にありと知れ  
ども今は機なし

聖ローレンツ寺院の内部も Tugendbrunnen の水も  
あわただしく見つ

ウユルツブルク。八月十一日、十二日見物す

ここに来る途中の畑に案山子ありパツリア農  
夫の貌おもしろ

友一人この教室に居りたるを訪ねしかども  
旅ゆきて居す

Doon はいづれの都市も持てれども年古りたれば  
心ゆかしも

馬鈴薯の畑のまはりに日向葵が高々と咲きか  
がやくごとし

シイボルトの記念像を暫し立ち見るに長崎鳴  
瀧の事をしおもふ

この大学の精神科主任のRieger翁は兎の腦を持  
ちながら話す

メイン河の橋わたり来て猶太童子の疎外せら  
るるを目のあたり見つ

ここの食店（しきくてん）に、"Trinkgeld nicht abgeschaffen"とことわりてあり

公園に大きき寒暖計するありて攝ツエルツユス氏の二十五度を示せり

大きなる鎌にて草を薙なぐこともおほどかにしていそがしからず

フランクフルト。八月十二日、十三日、十四日滞在、齋藤（豊）、寺田、清瀧氏等に會ふ

クールペの海波圖ゴオホのガツシエ像デュレ  
ルの父の像カタリナの像

熱心に語りやまぬ教授 Janelヤーネルのやぶれし靴を今は尊ぶ

ゲエテの家われも見めぐりおほよその旅人の  
 ごと出でて來りぬ

同胞の研究室を今日は見ぬ小さき不平も無く  
 て居りにき

河に沿ふ猶太街まで入りゆきてその雰圍氣を  
 おもひつつ居り

ギーセン。八月十四日、十五日

しづかなるギーセンに向ふは Robert Sommer 翁を  
 訪はむためのみ

碩學のこの老翁は山嶽に行かず日ごとにここ  
 にし通ふ



ライン河。八月十六日、マインツ市より、Kaiser Wilhelm II. 號  
 に乗船してラインをくだる。Rüdesheim, Bingen, Bingerbrück,  
 Assmannshausen, Lorch, Bacharach, Caub, Oberwesel, St.  
 Goar, Boppard, Rhens, Oberlahnstein, Koblenz 等を順々  
 午後四時半にボンに著く

釋きさなきよりラインの河の名を聞きて今日現け實まな  
 る船のうへの旅たび

ひだりにも右にもせまる山ありて麓ふもとの村は水みづ  
 にひたるごと

時により湖水こすゐのごとき寂さびしさを峽かたのラインは  
 示しつつあり

はるかなる行方ゆくへを暗指あんじするごときラインの流ながれ  
 にいまぞ順したがふ

山の上に尖塔あるをこの河の前景にして飽く  
こともなし

流れゆくラインの河はおのおのに支流をたも  
つ町を過ぎゆく

沿岸に成るべき必然の成りなりて大きながれ  
の止むときもなき

山の上なる古き砦の外貌のこの安定をひとほ  
好みし

ボン。八月十六日午後四時半、船より上陸し、獨り歩く

アメリカの旅人のむれにもまじはりて沈黙を  
せずけふの一日は

佛蘭西兵の往來せるが目になちてラインに添  
ふ静肅なる街

Storing 教授を訪ねむとしたりしが罷めてペ  
トゥフェンの家に来ぬ

Beethoven 若かりしときの像の立つここの廣場を  
いそぎてよぎる

公園のベンチにひとり腰をかけ Karl Simrock を手  
帳にとどむ

Köln 行の列車も列車も佛蘭西兵の占有にして  
つひに乗り得ず

ケルン。八月十六日夜辛うじてケルンに著きぬ

旅舎リヤなくて苦しみとほし旅來リキつる事のかずか  
ず人にか告げむ

Domドムにはしばしば入りぬ敗戦の悲哀ヒ示さぬこ  
この Domドムに

この大學をもつぶさに見たり快こころよかりし Dr. Wister-  
manマンの名をば記しるさむ

樂たのしみしきめぐりあはせかケルンに來てはからず  
數かず多くのゴオホを見たり

佛蘭西の士官等あまた往來ゆききする街上まちの夜にわ  
れは孤兒こじのごとしも

ケルンにて苦しき旅の最後さいごをば味あじははむとして  
ほとほと寢いねす

ベルリン。八月十八日より二十四日までベルリンに滞在す。宮城、  
大學、シャリテ病院、醫學書肆、美術館を訪うて日を過ごせり

前田茂三郎君と會し、神尾、福島、緒方、小野、赤松の諸君と會  
す。シャリテにては Prof. Seelert 案内したり

九ヶ月めに二たび此處に來りたりひとり旅し  
て此處に來りぬ

ウイールヘルム一世陛下の机には簡素なるもの  
を並べたまへり

藤卷ふじまきに來りてわが食ふ日本にほん食しょく白飯しろいひといへど過  
ごすことなし

大都會に形式のごと過ぐれども空むなしからずと  
のちは思はむ

ワイマール。八月二十四日。Goethe-Nationalmuseum, Schillerhaus, Schlosspark (Gartenhaus Goethes), Kunstausstellung, Denkmal. etc.

このふたりの詩人の臨終の部屋さへも年ふり  
ながら人に見しむる

みどり濃き園のなかなる家に入り萬國の旅人  
おのが名を書く

世の常の感激に似しころもて博物品類のま  
へに立ち居り

静かなる書齋と終焉の部屋と隣りあひを  
われ諾ひき

黄色の部屋にて彼は八十の齡のまにま食事  
るなり

静<sup>せい</sup>嚴<sup>げん</sup>なる臨<sup>りん</sup>終<sup>じゆう</sup>なりしと傳<sup>でん</sup>しありて藥<sup>くすり</sup>のそばに  
珈<sup>か</sup>琲<sup>ひ</sup>茶<sup>ちや</sup>碗<sup>わん</sup>ひとつ

おのづから日の要求と言ひいでしゲエテは既  
にゆたかに老いき

晩年のゲエテの名刺なども遺しあり戀ひて見  
に來む世の人のため

シルレルの死にゆきし部屋もわれは見つ寂<sup>さび</sup>し  
きものを今につたふる

ニイチエもこの町に來て果てしかど好<sup>この</sup>みてこ  
こに來<sup>こ</sup>しにはあらず

ワイマルの青き木<sup>こ</sup>立<sup>だち</sup>のなかにゐて短<sup>たん</sup>歌<sup>か</sup>ひとつ  
に暫しこだはる

ライプチヒ。八月廿五日。醫科大學精神癩學教室、グスターフ・  
フォック書店、美術展覽會その他

Bunke<sup>ブムケ</sup>教授の考案による病室の壁の色いろいろ  
に塗りてありしは

Bostereom<sup>ボステレム</sup>講師がわれを案内<sup>案内</sup>せり専門學的に複雑  
せるを

グスターフ・フォック書店の階上に時をうつし  
て日はかたぶきぬ

プラタヌスがしきりに落葉したりけり少女<sup>せうにょ</sup>の  
掃くも心<sup>こころ</sup>なごましむ

ウイールヘルム・ヴント先生みまかりて初期の論  
文をわれは求むる



ドレスデン。エルベ河。八月廿六日（土曜）、廿七日（日曜）。美術館（Madonna di S. Sisto）Riesa 號に乗り、エルベ河をのぼり Schandau に至る

この畫廊にラファエルのシスチンマドンナを  
今ぞあふげる旅とほく来て

この國のエルベの河のかはべりにかすかに降  
れる露をあはれむ

ザクセンの國の朝雲太陽が眞紅にいでていま  
だ低しも

城砦は山のうへなるしづけさを河中にして見  
さけけるはや

わがそばに國民學校の童女らが一團となりて  
集まりて居り

小景は常に樂しもこの岸に自轉車おきて釣する人みゆ

シヤンダウの丘かにのぼれば酸模すかんぼもあまたほほけぬ日本にほんのごとく

山なみの重るあひにエルペ河みなもととほし南のかたに

ここよりもなほし上うへらばチエッコ國こくの境さかいをこえてなほしゆくべし

山羊やまぎの群ぐん來きたるにあひて原始げんし的てき平和へいわを戀こふるわれは旅たびびと

夜よのねむりやはらかにまどかなりしこと殆ほととほと無なくに旅たびこし吾われは

ベルリン。八月廿八日、二たびベルリンに来る。前田（茂三郎）、薬師寺、梅津、石原（房雄）諸君に逢ふ。大使館にゆき、森鷗外先生逝去のを知る。記事は七月十日の東京朝日新聞なりしが、驚愕のあまり、森於菟、田邊元二氏を訪ふに、旅して在らず。廿九日、コッホ研究所、三十日、美術館、三十一日、動物園を訪ひ、同日夕ベルリンを立ち、九月一日朝七時維也納に著きぬ

伯林<sup>ベルリン</sup>にやうやく著<sup>つ</sup>けば森鷗外先生の死を知りて寂しさ堪へがたし

歸りゆかば心おごりて告げまゐらせむ事<sup>こと</sup>多<sup>ま</sup>なるに君はいまさず

ベルリンを去らむとして二時間あまり動物園に來りわが居り

この五月<sup>ごがつ</sup>生<sup>な</sup>れたりといふ日本<sup>にほん</sup>鹿<sup>しか</sup>「Sika」と記してあるも親<sup>した</sup>しも

車房に入りて腰をおろしし時の間のこの安け  
さを何とか言はむ

難儀なる旅をつづけて歸りこしこの狭き部屋  
の平和悲しも

やすらぎも極まるごとし維也納のわが床にう  
づまり眠らむとして

維也納歌稿 其二

九月十日（日曜）、Modling 行。Lichtensteinburg を見る

石をもてつみあげし城寒々としたる内部に美  
しき書齋あり

九月十七日(日曜)、Tullnerbach 行

松の樹に小さき十字架など懸かりたる山に入り来て二人居りつも

木もれ日がをとめの顔にあたるときまぼしといひて言のかなしき

この川のみなもとに人音せねば落葉をくぐる水の聞こゆる

縦木原深きをくぐりくれなるのあざやけき斑の茸を見たり

木原いでて谷間の道日の照れば黒き莓をあま  
たも食みつ

蟬ひとつ鳴かぬ夏山ふけむとし遠國びとのわ  
れを居らしむ

都會より來にし人々茸をばルツクサツクに大  
切にせり

かへり路に居れば一日のをはりなるみ寺の鐘  
は山こえて聞こゆ

しづかなる黄のいろの空や維也納のうへにも  
長き餘光をたもつ

九月十九日(火曜)

「マアルブルク教授予の標本を一覽す」新秋の夜  
に記しとどむる

もの食ひつつ下向きに来る少女あり街上にし  
て言を問はむか

九月二十三日（土曜）。猶太新年、Müllergasse Israeltempel.

いろいろの帽をかむれる猶太族殿堂に居りて  
帽を脱せず

神殿にむかひて法衣のかがやくを著たるが聲  
あげて平安を呼ばふ  
雷がとほくの方になりしころ第九區のひくき  
石道を來る

九月二十四日（日曜）、Schwarzenberger Park.

基督教的右黨のデモンストラチオン街をうづ  
めて歩きそめたり

橡の實がすでに金つき落ちゐるを吾はよろこ  
ぶ一人來りて

剛みたる日月なりしがリンデンの落葉ふかき  
を踏むべくなりぬ

木立には人のほひもなかりけり落葉おしな  
べて深くなりつつ

九月二十五日(月曜)、大學講堂にて

グレゴル・メンデル百年祭の講演を聽きて眼を  
みはりつつ居り



九月廿九日(金曜)

ゆうべあやしく日本に歸りし夢見たり吳先生  
に會ひてをるゆめ

十月一日(日曜)、雨降、籠居

うすら寒き一日<sup>ひとひ</sup>くれたり家こもり<sup>チオニスムス</sup> Zionismus の話  
をしつつ

十月四日(水曜)、太田正雄、正宗得三郎二氏に會ふ

巴里より旅し來れる友ふたり秋ふけし維也納  
の街を寂しむ

十月廿日(金曜)

入りかはり立ちかはり友ウインに来てその日  
その日の楽しさを得つ

十月廿一日(土曜)

マルガレト浴場の中にあたたまる二月ふたつきぶりの  
入浴にして

ワイドリンク。十月二十二日、詩人Tegoroの墓にまうづ

リンデンの黄に色づきし木のもとに落葉がた  
まる日に照らされて

ひむがしの國の旅びとたたずめるワイドリン  
クがの川水のおと

悲しみを歌ひながらに氣狂ぐるひて果てしレナウ  
の墓のべにたつ

たどり來しレナウの墓の傍にほほづき赤くな  
れる寂しさ

この墓に黃菊ぎくの花の咲きたるを驚かむばかり  
かなしむわれは

秋ふかき村の小さき墓地中の胡桃くるみの木より落  
葉しやます

墓のべに年ふりてある垂り柳芽ぶかむとする  
春しおもほゆ

うちわたす低き山々  
褐色かはいろに色はしづみて秋ゆ  
くらむか

ドウナウの岸の林の中に入り  
水泳場スイチヤウを見めぐ  
りありく

激たぎちなくはやきドナウの水のうへ  
白しろき鳥群トリる  
秋は寒ふきに

十月廿九日(日曜)

數萬にのぼる Sozialdemokrat の示威運動あれど學  
生團比較的小すくなし

猶大殿堂に結婚式を見に來たり同族のもの  
み此處ここに集あへる

部屋に歸りて靴下のほころびを縫ひ體を丁寧  
に拭きをはりたり

十月三十一日(火曜)、日本天長佳節

天長の佳き日を祝ひまつらむと公使館にゆく  
街上寒し

本田公使「牡丹正宗」をめぐまれぬゆふぐれぬう  
ちに酔ひて歸らむ

街頭に賣る菊の花見るときぞけふのよき日を  
祝ぎたてまつる

十一月一日(水曜)、中央墓地

この墓地のしづけさか行きかく行けば常の日  
の「苦」も忘れてゐたり

十一月四日(土曜)、公使請待

日本ほんの醤油をもて肉を煮るかたはらに午旁の  
味噌づけありて

十一月五日(日曜)、Weidlingau Wazbach

一谷をうめつくしたる落葉かな Weidlingau の山  
のこがらし

この谷の落葉かつしよく褐色しよくに深きにも入り来りけり心  
は和なぎて

わが體からだうづもれむとすとおもほゆる深き落葉  
 のなかに居りつも

この山にこがらし吹きて一ひとつ鳥啼とりくこともな  
 し谷のこがらし

異國いこくの山谷やまに來てかく深き落葉に入らむとわ  
 れおもひきや

谷淺きところに一ひと人木を伐りぬこだまは聞こ  
 ゆ向むかひの山に

寒き雲はやきかなやといひしばかりにわが目まな  
 交まじりに雪降りみだる

わがむかふ山にうねりて見ゆる道さやかに白  
 し雪ふりつれば

山に沿ふながれにいでぬかずかなる小魚泳ぐ  
をみとめて樂し

十一月十一日(土曜) Staatlicher Feiertag

教室がけふ閉ぢたればクレベリンのヴント追  
悼せる一文を讀む

十一月十二日(日曜)、同じく共和國記念日

日曜を待ち居たりしが群衆を見に出でて來ぬ  
寒き曉

小山よりふりさけみれば國原はうす霧こむる  
そのはたてまで



十一月十五日（水曜）、猶太養老院を見る。Klosterneuburg,  
Kierling に行き、Stiftkirche を見る

過去の代の猶太の墓地を第九區の市中に見て  
身に染みにけり

キイルリンクのStiftkellerにくれなるの葡萄の酒  
を愛し時たつ

十一月十八日（土曜）、寒氣強し

辛うじて部屋あたたためしけふの午後鷗外先生  
の臨終記よむ

十一月九日（日曜）、オウベルシュタイネル先生逝く

ハインリヒ・オウベルシュタイネル先生死し給  
ひ堪へがてに寂し立ちても居ても

先生の膝下にわが業をささげむと心たのしみ  
て日々を競ひき

あたたかき御心をもてわがかしら撫でたまひ  
たるごとくおもひし

十一月廿二日(水曜)、オウベルシュタイネル先生葬送。シュュー  
ルトの "der Tod und Mädchen," "das Wirtshaus." "うた  
ふ

老碩學の棺のまへに相ともに涙垂れてシュー  
ベルトうたふ悲しみ

ドエブリングの墓地に葬りのつひの日に雲ひ  
くくおりて寒さいたしも

Richard Hertwig も十六日に身まかりゆきし柏林  
 のよる

○先生は脳の實驗病理學を若くして建立した  
 まへるなり

ブロンセカールの説を駁せし青年學徒なりし  
 日の先生おもほゆ

三日まへ降りたる雪の消えのこる道をかへり  
 ぬかうべを垂れて

先生の遺言に「日本醫育」のことありとマールブ  
 ルク教授が語る

十一月廿五日(土曜)

埃太利人の休日サタムロの過多を論じたるエルンスト・クラウゼの論文が出づ

十一月廿八日(火曜)、猶太學生排斥運動

獨逸系學生團隊の動きにも胎動のごときあり  
て未だ模索のみ

十二月五日(火曜)、オウマルシュタイネル先生の追悼會(Trau-  
ersitzung)等

ワークネル・ヤオレック教授も立ちてオ先生を  
讀へたるが簡潔にて可也

マールブルク教授は門下生後繼者として碩學  
マイネルトに比す

十二月十四日(木曜)、夜街を行く

黄いろなる霧こそたてれ襟たてて夜の街を  
ひとりし行けば

おぼほしく冬さむき夜々に立つらむか維也納  
の街のきなくさき霧

十二月二十三日(土曜)、暮の市場

時のまもかりそめならぬわが業をいそぎいそ  
ぎて年暮れむとす

冬寒くなりまさりたる街上にこころ空虚をお  
もふひととき

いろいろの野菜も積みぬドウナウの鯉となら  
びてイタリアの魚

十二月二十四日(日曜)、クリスマス夕

シユテフアンスキルヘ  
Stephanskirche に来て群衆のなかに寺院樂みんがくを聞け  
るこよひかな

十二月二十六日(火曜)

シユテフアン寺じカボチン寺アウグスチン寺じ奉ほう  
獻けん寺等の寺院樂および黙禱

ゲゾイゼ行。十二月二十七日より三十日迄 Gesäuse に遊あそぶ

温き朝の乳のむ卓のうへプフシユタインの位  
置をしるしつ

高山のいただきに日のあたるころ  
白目 谿谷の  
大きをおもふ

この狭間の奥より來つる馬櫓が鈴つけしかば  
山に聞こゆる

大きなる山の膚も白くなり谿のひびきを吸ふ  
がごとしも

櫓に乗りすべりて遊ぶ童子らはこの旅びとを  
あやしみもせず

おのづから牛馬の飲む泉ありて彼等みづから  
こもごもに飲む

峽の奥より木材はこぶ牛と馬と十二基ほど  
また歸り行く

この道に小さき食店ひとつありいたく鹽辛き  
肉汁飲ましむ

ヨオンスバツハ  
Johnsbachにたどりつけばこの村の墓地もふかぶ  
かと雪にうづみぬ

雪道を四キロも通ふ童女ありヨオンスバツハ  
の小學校に

食卓のうへに載りたる「鹿の肉と團子」より暫し  
白き氣たつ

小さなる祠のなかにキリストの繪馬あまたあ  
りこころ親しく



縦樹立くらきがなかにのぼりゆき鹿の臥處を  
わが見たりける

雪つもるこの山の獸にあたへたる食餌のこと  
を語る媼よ

ここにして山のけだもの愛したる Moritz Janniss  
の名をぞとどむる

十二月三十一日(日曜) Café Astria, Café Atlantis.

寺院に入りて老いし僧正の説教を聽きてより  
夜のカフェに入る

群衆のみなざりてゐる眞夜なかに葡萄の酒を  
高くささぐる

何事も忘れしごとく  
樂しむはあはれこの都會  
の人のみならず

一とせをかへりみすればわが生の貧しかりし  
をな疑ひそ

此處に來てより堪へがたくしてあらはれし小  
さき怒もいめのごとしも

維也納歌稿 其三

大正十二年(西曆一九二三年)一月一日、コメンツル

孤獨なる寂けさをけふ保たむと  
Kobenziなる山  
に入りけり

一月いちがつの一日いちにちをひとり寂しづかなる山やまに來きたりて晝ひるの食しよくをす

いろさびて落葉おちばつもりし木原きはらをば踏ふみつつぞ  
ゆくけふの一日ひとひを

ちりしける落葉おちばの山やまはふかぶかとさながら遠とほ  
く谷やまにつづけり

けふ一日ひとひ日本語にほんごを話はなすこともなく新あたらしき年としの  
はじめをぞ祝いわぐ

ほそき雨あめいつか降り來きたて谷たに落葉おちばぬるる頃ときはひ  
去いりゆかむとす

一月二日いちがつににち(火曜かよう)、公使館祝辭こうしつかんしうじ

公使本田閣下に祝辭のべ歸り來て靴下と慣鼻  
禪と洗ふ

一月十一日(木曜)

ふるさとに七歳になれる穉兒の寫真を見つつ  
こよひはねむる

一月十三日(土曜)、維也納著一周年

去年のけふ Wien に著きたることおもひひとり  
しづかに夕食すます

一月廿一日(日曜)

あらゆる黨の合同示威運動あれば佛軍ルール  
占領に關聯すべし

詩人歌ふ „Heil dir, mein Volk, mein Vaterland! Du kannst  
nicht untergehn!“

おなじ國語を以てる二國がおこなはむとする  
行動を見む

二月三日(土曜)、赤松信磨君一月三十日病歿せり

同船にて來りし君がベルリンに死にたりとい  
ふ動悸しやます

二月十一日(日曜)、紀元節

雪ちらちらと降り來りたり日本の紀元節の日に  
 實驗をする

三月三日(土曜) Antisemitische aggressive Bewegung.

猶太排斥の實行運動町を支配して大きく見ゆる  
 旗たてきたる

三月八日(木曜)、論文原稿全部纏めて發行所 Deutsche に渡しぬ

残念も何も彼も澹くなりゆきて重重とせるわ  
 が原稿わたす

一區劃とおもふ心の安けさに夜ふけてかへり  
 わが足洗ふ

三月十四日（水曜）

ロンドンにて此日<sup>このひ</sup>歿したるマルクスの記念日  
を“marktschreierisches Getue”と評せるものあり

(註) Karl Marx, ein Jude aus Trier, ist am 14. März 1883 in  
London gestorben. Die Wiederkehr seines Todestages wird  
überall dort, wo seine Nachtreter haufen, mit marktschreierischen  
Getue gefeiert.

三月十八日（日曜）、示威運動あり。維也納メッセ初まる

プロレタリア<sup>プロレタリア</sup>とブルジョア<sup>ブルジョア</sup>との分類<sup>ぶんるい</sup>に人為的なる無理  
かもあらむ

「階級の戦闘」といふ一語さへマルクス以来のい  
きほひがあり

春の旅。バードカシユタイン。三月三十日（金曜）、午前七時五  
 十五分離也納發。午後七時十分バードカシユタイン著、Hotel  
 Moser に投ず

尖りたる寺院の塔はいづくより見てもこころ  
 の清まるらむか

郊外にさしかかりつつ丘かげに雪きえのこる  
 春寒きかも

わが胸に袋をさげて種子をまく農を見るべく  
 春はなりぬる

ひろびろとしたる畑に馬並めて耕すも見ゆ畑  
 はかぐろし

路傍なる柳の木には青き芽も黄なる芽もふき  
 春光さす



ドナウ河見えそめてより風景にたまたま山上  
の砦などあり

山村の高きに寺がひとつ見え白き川原が見え  
つつわたり

ドーナウの水面ちかく黒き鳥みだれてぞ飛ぶ  
旅のひととき

陶器工場の大きなるもの此處にありて大戦時  
中は閉ざしたりとぞ

Lambach の修道院も傍看し雪をいただく山にち  
かづく

雪のこる山のかげれば灰色になりて見ゆるも  
山いつくしも

ある驛に來りしときに木炭がたかだかとして  
つみてありたり

高山の峽の川原は此處よりも高きにありてさ  
びしきろかも

小鴉が山すれすれに飛ぶごとく見ゆる狭間を  
我等は過ぎつ

バードカシュタイン。三月三十一日(土曜)、復活祭前夜(Kar-  
samstag, Osterabend).

川しもに霞はこめてゆふぐれむとす温泉街の  
高きに見れば

絲のごとき瀧のいくつも見ゆる山富人つどふ  
夏の真中は

この峽にこだまをおこすところあり、Echo am  
Echo "とぞいふ

のぼりゆく汽車にむかひて犬が吠ゆオウスト  
リアのこの山の峽

山かひの美しき村一つありしばらくにして月  
照れる見ゆ Hofgastein

東海のくにの旅びとこよひ食ふ復活祭の卵と  
魚を

Ache 川の谿谷のぼり浴泉の街にこの夜をわれ  
はねむらむ

四月一日(日曜)、復活祭の日曜 (Ostersonntag)

復活祭の朝にうちたる銃のおと谷谷わたるこ  
だまとぞなる

真赤なる燈明ひとつもりたり復活祭のみ寺  
のなかに

み寺より鐘鳴りわたる復活の歡喜の日の天ふ  
るはして

獵人は古き日よりのおこなひを今日につたへ  
て銃とどろけり

連れだてる女をとめはことごとくザルツブル  
クの古裝をしたり

み寺には香のけむりの立のぼりもろもろ歡喜  
の讚をうたふ

Pfarrkirche

祭日まつりびの酒のみかはす人々は東海とうかいのくにのわれ  
に親したしむ

雪道ゆきみちの Promenade を吾は行く富人とみびとら群あひれて歩あひみ  
けむ道

山がひの雪消ゆきけの道に落の葉もえつつぞ居るか  
なしきまでに

谿谷たにの魚食はしむと言ひてあり“Jansenstation”の  
文字の親しさ

いちはやき春の光にこの谿に黄なる小花が咲  
き満ちむとす

四月一日、午後三時五十五分發車して、インスブルクにむかふ

朝寒をおぼえたりしが我腹のしくしくいたむ  
ころ立たむとす

Badgastein, Hofgastein, Dorfgastein  
アーヘ川のひとつ谷  
なる

小鴉のしきりに飛ぶを前景に Bruck の驛に日は  
かたぶきぬ

湖岸の Zell を過ぐれば静嚴の山みえそめておど  
ろく吾は

ちかちかと天そそる山のいただきは全けく白  
し春日てれども

Wörgl 驛を過ぎてよりわが汽車は車房暖たむ峽  
ふかくして

インスブルク、四月一日夜著、ホテル・クライド投宿

チロールの山間の都市まだ寒しよろひたる雪  
の反射に近く

この町のマリアテレジア街上をゆく女等は顔  
赤羅ひく

もろともに生の命をささげたるチロール戦を  
此處に傳へぬ

Andreas Hofer の墓石目のまへにあるをおもへば  
旅ぞ愛しき

かくのごと高くきびしき山々のかたまりを見  
て言も絶えたり Hungerburg 上

午ひるの鐘かねフランシス寺じより鳴りわたるこだまは  
こもるこの谷や々に  
おなじく

大おほき山やま團塊だんくわいとなりありたりき  
Sutbaj 谿谷せきや線せん Bren-  
Hel 鞍部あんぶ線せん

高たか原げんは山やまの中腹ちゆうぶにいくつかありその高たか原げんは寂さび  
しくもあるか

チロールの山やまの奥おくなる限りなきアルプの山やまに  
陽ひかりはかたよりぬ

太陽たいやうはまばゆきひかり放射ほうしゃしてチロールの野の  
に草くさ青あおく萌もゆ

しばらくは奥おくの奥おくなる雪山ゆきやまの頂いただきあかく染しまる  
を見たり



うつくしきものにもあるか峽とほく入日をう  
 けし雪のいただき

インスブルクに一夜安らかに寝たりけり雪の  
 奥山おもひうかべて

四月三日(火曜)、午前八時五分インスブルクを立ちザルツブルク  
 にむかふ

朝明けしインスブルクの奥の山雪ある輪郭が  
 するどく浮かぶ

陽をうけし雪溪のいろむらさきに西北方に極  
 まらむとす

向うには夫婦の農夫働きて前景に黒衣の老媪  
 が歩く

野のなかを雪解の水が流れをり水くさなびく  
その急流に

おもひがけなき山嶽の雪が見ゆ野にも平たく  
雪のこりつつ

分水嶺越えたるらむか山の川ほそくなりつつ  
激つおとすも

いつしかも Reiteralp に近づきて見ゆる山山する  
ときろかも

ザルツブルク、四月三日 Dom, Residenz, Mozartplatz, Denk-  
mal, Mozartgeburtshaus, Mozartmuseum, St. Petersfriedhof,  
Festung (Hohensalzburg).

ザルツァハ河とカプチン山と相寄りしこの  
都市にモツァールト生れき

Dom の内部白くして彫刻繪畫ありその鐘のお  
と聴かずして出づ

宮殿のゴブランも暖爐も食堂もせまき廊下も  
皆見たりけり

モツアールト生家の二部屋暖爐あり幼童なり  
し彼の肖像あり

彼ののこしし魔笛の第一版その他の樂譜免  
状など見つ

聖ペトロ墓地にのぼり縁起をも調べぬうちに  
いそぎてくだる

それより古城の塞をも見たりその一部見て  
Monchsberg にのぼる

小さな博物館に物寂びし郷土的のものいろいろとあり

グムンデン、四月四日、午前十一時五十分ザルツブルクを發しイッシルを経てグムンデンに至る

同じ車房のザルツブルクの婦等の素樸なる風をわれはよろこぶ

青野なる光みなぎり岡のへに案山子たちて女の衣着せたり

大きな湖水二つがつぎつぎに展開し來てすべて樂しも Mondsee, Attersee.

浴泉地として離宮のありし Ischl はイッシル川にいだかれて居り